

Title	平安後期・鎌倉時代物語を相手にして
Author(s)	大槻, 修
Citation	大阪大学古代・中世文学研究会会報. 1985, 1, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67224
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

会報

大阪大学古代・第一口
中世文学研究会 昭和六〇年六月

平安後期・鎌倉時代物語研究を相手にして

大概 修

まずは回想録から。ジャーナリズムの世界に十年近く、やっと学問研究の場に戻ろうと、昭和四一年、大阪大学大学院（修士課程）に入學した。学部卒業時に「狭衣物語」を扱った関係上、引き続き平安後期物語に情熱を燃やすべく、文学部資料室の書架でフット目に止まったのが古典文庫本「在明の別」まさに宿命的な出会いと申すべきか。悪戦苦闘の末、巻三冒頭部分の錯簡を証明し、天理図書館報「ビブリア」第三四号に発表、いわば学会へのスタートを切った形。これが機縁で当時名古屋大学の村博司先生を初め、中京の諸先生の指導を受け、「在明の別錯簡攷」を祝して、高木市之助先生はじめ連名の「雲牀会賞」を賜った（その中身は名産きしめん）のも懐かしく有り難い思い出である。昭和四三年一月、修士論文「在明の別についての研究」を提出（一部に「サイメイノベツ」て何や？の声あり）、翌年、松村博司・石川徹両先生のご尽力あつて、同題にて桜楓社より刊行、当時ご在職の林和比古先生還暦を祝し、犬養孝先生の題答をかたじけなくした。大学院博士課程に進んだ初夏、「在明の別」作者に関して中古文学会発表、こうして平安後期

・鎌倉時代物語の研究は軌道に乗り始めた。山岸徳平・松尾聡両先生の知遇を受け、五年後に「あさちが露の研究」（昭和四九年）を刊行、その間、当時天理大学の中村忠行先生のご支援を賜っている。「院生たる者、一年間に二本は論考を活字発表しなくくちやダメ！」と、語気鋭く叱咤激励くださった犬養先生、縦横に研究の場を提供くださった林先生一両師の絶大な支えを受けて、今の私がある。さて研究余滴。以後「松浦宮物語」「岩清水」「いはでしのぶ」「風につれなき」「苔の衣」「むぐら」「我が身にたどる姫君」「風に紅葉（春日山）」「木播の時雨」「恋路ゆかしき大将」「小夜衣」「忍び音」「白露」「あききり」「葉月物語絵巻」「兵部卿」「別本八重葎」「松陰中納言物語」「夢の通ひ路」「夜寝覚（改作本）」と、つきつき学部・大学院生を相手に読み続けてきた。神野藤昭夫・三角洋一・阿部好臣各氏一在京の俊秀ともども、家内を巻き込んで計五人編になる「平安後期物語選」（浜松中納言・狭衣・夜の寝覚・とりかへばや・堤中納言 昭和五八年三月、和泉書院）を作成したのも懐かしい。「夜の寝覚」四部構造に関する野口

元大・永井和子兩氏の論、「狭衣物語」に關す三谷
栄一氏の系統論など、今後も興味ある命題であらう
し、「二巻本むぐら」「あききり」「苔の衣繪巻」
の新たなど解明を待つ対象は数限りなく多い。
松尾聡・小木喬氏の知遇を受け、散逸物語復元の
方法論を勉強したが、近時、樋口芳麻呂・三角洋一
氏らの活躍は瞠目に価しよう。かつて日本古典文学
影印叢刊「物語二百番歌合・風葉和歌集桂切」の月
報一四に拙稿「物語評論と物語二百番歌合」を發表
したが、一部に樋口氏の成果をみる(同氏「平安・
鎌倉時代散逸物語の研究」(ひたく書房)所収)よ
うに、「物語二百番歌合」と「無名草子」との諸々
の關係、さらに「風葉和歌集」を取り込んで、三者
間における物語・物語歌、その詞書、さらに評論の
位置付けなど、今後委ねられた研究テーマは魅力

的である。ただ、昨今の論考の中に、いわば枝葉末
節、重箱の隅を楊枝でほじくる類を見るが、確固と
した自己の研究視座を持たねばなるまい。加えて、
言葉の遊戯的な、難解な語句の羅列による異様な文
章を散見する。平明にして魅力的な文章―思わず読
んでしまった、と感嘆させるような文を綴りたい、
とこれも自戒の弁。

最後に蛇足ながら、この期の研究に適した参考文
献として①「特集総覧・物語文学」(国文学解釈と鑑賞
五七五、昭和五年一月、至文堂)、②「物語の視界―
古典に躍る創意の群れ」(国文学解釈と鑑賞 五九七、
昭和五年一月、至文堂)、③「研究資料日本古典文学」
(昭和五八年九月、明治書院)を、まず掲げておきたい。

(甲南女子大学)